

オランダの極右政党の衰退（626号）

2025年 11月 石館

10月29日に投票、即日開票されたオランダ下院（定数150）の総選挙で、中道左派“民主66”が第一党になる見通しだと発表された。オランダは比例代表制であり、競っていた極右政党“自由党（PVV）”と26議席ずつ並んでいたが得票数では民主66が優っており第一党になる。民主66は、改選前の9議席から約3倍増となる躍進を遂げた。



オランダは日本の約9分の1の面積で人口は約1800万人の小国である。しかし1人当たりのGDPは世界のトップクラスである。

2年前の前回選挙で初の第1党になった自由党は、イスラム移民の排斥など極端な外国人政策を打ち出したことから政権内で対立。わずか11か月で政権から離脱した。選挙前から主要政党が自由党との連立を拒否しており、仮に第1党になっても政権入りは低いと有権者が判断し、37議席から大幅に減らす結果となった。



民主66のイエツテン党首

オランダ下院では今回、15党が議席を獲得し、小政党が乱立。民主66は今後、少なくとも4党による連立政権の樹立を模索していくことになる。もしイエツテン氏が首相に就任すれば、38歳で史上最年少の首相になる。

オランダでは複数政党による連立政権が一般的だ。2党の獲得議席数が同じ場合、最多得票の民主66が連立交渉の主導権を握ることになる。主要政党は極右の自由党との連立に否定的で、欧州メディアはイエツテン氏が首相に就く可能性が高まったと一斉に報じた。各党は11月初旬から本格的協議に入る。

2023年の下院選で37議席を獲得した自由党は前回同様、反移民・難民や反イスラムの主張を軸に“一点突破”を狙った。ただ党首のウイルダース氏は過激な言動で知られ、連立政権でも反移民政策に関する要求を重ね、連立崩壊につながった。



自由党のウイルダース党首
オランダのトランプと言われる。

ポピュリスト的な言動で勝利しても連立の過程で妥協を迫られることが多く、政権運営で行き詰まった。それに不満を募らせて連立を崩壊させたウイルダース

氏の統治能力の低さが露呈した。

イエツテン氏の連立政権への道のりは容易ではないものの、同氏は迅速に始動したい意向を示している。イエツテン氏は投票が終了した後、これまで30議席未満でオランダの選挙で勝利した政党は存在しなかったと述べた。

同氏が連立政権を樹立するには、過半数となる76議席を確保するために、少なくとも他の3政党の支持が必要となる。もっとも有力な候補は、中道右派リベラルの自由民主国民党（VVD）か、左派の労働党と緑の党連合、そして“キリスト教民主アピール”とされているが、これが実現するには数か月を要する可能性がある。

23年11月の選挙では、半年以上たった24年7月ようやく4党連立の新政権が発足したが、政治経験のない元情報機関トップのスホーフ氏が就任する異例の事態となった。

イエツテン氏は“オランダだけでなく世界に、ポピュリストや極右運動を打ち倒せることを示せた”と語った。EUやNATOとの連携拡大に前向きで、気候変動対策も推進する。

選挙戦では欧州で深刻になっている住宅問題の解決を訴えた。若者や中・低所得層が住みやすい環境づくりを揚げ、新たな開発や支援策の必要性を説いた。

イエツテン氏は現政権の方針を引き継ぎ、ウクライナ支援やロシア制裁を維持する立場をとる。同氏も前回のウイルダース氏と同様、難しい連立交渉に臨む。数か月かかるとの見方もでており、当面は重要政策の停滞につながる恐れもある。

今回の連立崩壊による政治危機は、ヨーロッパ全体で見られる極右政党の台頭という大きな流れの一部である。フランス、ドイツ、そして最近のポーランド大統領選での保守系候補の勝利など、移民問題と生活費高騰への不満が右派ポピュリズムを後押ししている。



現実の政争をよそに美しいオランダの景観は変わらない

従来の中道政党への信頼失墜も深刻である。労働党が2017年の総選挙で得票率5%まで落ち込むなど、既成政党の求心力低下が顕著になっている。

多党制の下で形成される連立政権では、異なる政治的立場の政党間の合意形成が極めて困難になっている。特に移民問題のような感情的になりやすい争点では、妥協点を見出すことが益々難しくなっているのが現状である。日本の政党も多党化に向かっており合意の形成が難しくなっているのは他人事ではない。

オランダの政治危機は、一国の問題を越えて、現代ヨーロッパが直面する構造的な課題を象徴する出来事である。移民問題、経済格差、既成政治への不信といった要因が複雑に絡み合い、安定した政権運営を困難にしている。

今後のオランダの新政府の行方は、オランダ国内だけでなく、EU全体の政治的安定性にも大きな影響を与えることになるだろう。ただ自由党が圧倒的な多数党になりウイルダースが首相になるような事態が避けられたのは多少の安心感を与えたであろう。

